

【いぬばしり】

ぼくが初めて賭け事を行ったのは、十歳の夏でした。

村の連中は「競馬」ならぬ「競犬」と云っていましたが、ぼくら子供は「犬走り」とよんでいました。

村の広場に囲いを作って、犬が駆け回る。

走る五匹の犬のうち、一着と二着をずばり当てれば、大金が入る仕組みですが、ぼくらは賭けるお金がなになので、ともだち同志で、薩摩芋を持ち寄ってそれを賭け、当たった者がそれを一人占めするのです。

犬は番号の付いたちゃんちゃんこを着ているのですが、ぼくらは犬の色で賭けていました。

黒犬、赤犬、白犬、灰犬、茶犬の五匹です。

ぼくはいつも決まって、赤犬と白犬に賭けます。

どちらを一着にするかは、そのときの気分。

この日は、赤犬が一着。

「はしれはしれ、いぬばしり」

「いけいけ、あかとしろ」

がنگん応援するのだが、どうしたわけか、赤犬と白犬はいつも遅いのです。

だから、だれも賭けないから面白いのだが、やはり賭け事は勝たねばならぬ。

「なにしとる、はしれはしれ、いぬばしり」

「それいけやれいけ、あかとしろ」

そのうち、どうしたわけか、犬が四匹になってしまっています。

よく見てみると、赤犬と白犬が一つになってしまって、紅白犬になっています。

しかも二匹分だから早いなのって。

結局、一着。

でも、これはどう考えたらいいのか。

賭け事に勝ったのか。

完全に勝ったとは云えないまでも、完全に負けたとも云えない。

村の連中ももめているけれども、ぼくらももめた。

もめたけれども、やはり面白かった。

紅白犬なんて、「いぬばしり」でもなければ、こんな事態にはならないだろうし。

これだから、賭け事はやめられぬ。